

原意と反省（承前）：論説

著者	藤本，充安
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 5
ページ	1 - 1 1
発行年	1894-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/4368

龍南會雜誌第貳拾五號

論 說

原意と反省 (承前)

在法科大學 藤 本 充 安 稿

第二過量の反省を有する人

世に一種の人あり一事を爲んと欲しては其の事の當否を顧慮し一事を信せんとしては又其事の信ず可きやを孤疑す一意一顧一信一疑執る所なく爲す事なきは此種の人の常態ありとす此れ上に已に陳へたる種類の人と正反對に立つ所の人にして第一段に論じたる例を以て説明すれば此種の人にして目前にある菓子を食べはんとする原意を起したりとせんか直に其菓子は食ふて可あるやとの反省を起すある可し否之に止まらざるあり「菓子は食ふて可あるやとの反目は可あるや」と反省するある可く遂に其究極あかる可し即ち此の種の人には誤錯失策等は或は決して之なかる可きも其代りに一片の行爲作爲たも爲し得ざる可く又一の信仰もある可きなり語を換へて之を言へば此種の人には過失錯誤等なく萬事消極的なるか故に一の信仰なく従つて一行爲なく即積極的の事業なきなりされば疑を要する真理の研究等には此類の人も甚必要な可く即懷疑哲學は此種の人の唱へ出したるものある可く之て此等理學には必要な可きも吾人有爲の青年之を學ぶ可きや否や余は斷して然らずと言はんの如何となれば今日の我日本は未だ容易に哲學界に枕を高ふするの境遇にあらざるを信すればあり

以上を以て吾人は過量の反省を有する人の失即短所を陳べたり然るに一事に利害の必ず相伴隨するは一の眞理にして此場合にも亦利あり長所あり即謹慎とか周密とか内氣等は此種の人の長所ある可し又其代はりに上に云へる如く不決斷、孤疑、躊躇、無氣力等は此種の人の短所にして避く可らざるものとせば青年學生は宜しく注意きて此の種に陥らざるを勉ふ可きあり

第三原意に反省を加へて其原意の可否を驗し而して後其原意を實行する人

以上論する所よりて見れば第一段の反省なき人にも長短あり第二類の人にも亦長短あり然れども第一類の短所は其反省少なき所にあり第二類の短所は其反省の多きにあり然れば則反省を要することは明なれば吾人が研究す可きは幾何の反省必要あるかの問題なりとす即適量の反省は吾人に必要あることに歸す即第一類の人に附與するに若干の反省を以てせば此に初めて完全の人を視るを得可く余が所謂第三類の人之なりとす何となれば此類の人には反省なきかと云ふに反省はあり即第一類の短所は避け得たり又過量の反省ありて一の行爲も一の信仰もなきと云ふに原意の可否を驗して後之を(原意)實行する人なるか故に固より行爲あり又勿論信仰あればあり余が所謂吾人の標準とす可き人は此類の人にあるあり余が所謂大人豪傑とは此類の人を指すあり固より大人豪傑の一部は第一類の人にある可きも彼の類には誤天下漢あるを免まざるは上に已に云ふたり之れ忌む可きことたり然るに此の如き人は此第三類には見出す可らず何となれば此類の人は或原意を實行せんとするに當つては先づ其原意の可あるや否やを驗すればあり今之を古今東西の人物の跡に視れば思半ばに過くるものあらん

先づ手近き所より云へば徳川家康の大人豪傑たるとは世間異論なかる可し然らば家康の家康たる所は何處にありや源氏の長者征夷大將軍とありしときか否此は豪傑たるの結果なり大坂陣の時にあるや否々此も結果なり余以爲く其信玄との合戦に濱松城を開いて彼を向へたるときよありと何となれば彼を敗衄長驅えて遁れ歸れり常人の考（即原意）よりすれば城に入らば先づ其城門を閉すの計に出てさる可らず然るに彼れ之に出てずして其門を開て以て信玄を向へたる手際こそ彼れ勝に乘したる信玄をも能く拒き止めたる所以にして信玄をして勝ちても恐る可きは家康なりと歎せしめ遂に攻めざらしめたる所以あり之れ余が家康たる實に此一擧にありと云所以あり然れども一步を退いて考ふれば未だ以て可なりと云ふ可らざるものあり彼れの彼たるは恐くは此開城待敵の擧にあらずして其垂蹙のときに家臣の背にありて小兒の戲戰を觀まとき童軍二隊に分れ一隊は人衆多く一隊は兵數寡少ありしは彼れ弱少の豪傑は其少數の隊か必ず勝つ可きことを豫言を身を其中に置かんことを云へりしかば家臣其故を問ひしに少豪傑曰く多きものは衆を頼んで必合せず少きものは心一ありと然るに兇戰果して兵數寡少の隊の勝利に歸せりと云ふ余以爲く彼れの大將軍たるの技量は已ふ此時に發せざるなりと蓋此豫言と云ひ彼の開城待敵の擧と云ひ實に人意の表に出づるの擧動に於て常人と大人との區別の境界をなすものなり何とあれば常人の考は某事物に對して第一に起る者を實行するものなるか故に濱松城の場合には固より堅く門を閉さして守るの計に出づるや必せり然るに異人（常人にあらざる）は此場合に望んで上の原意に反省を加へたるに外ならず即常人の閉す可き所に一反省を加へて之を開きたるなり又兇戰の場合には常人は必ず言はん衆を有する隊は人寡き隊に勝たんと之れ常人の必ず考ふ可き順路あればなり然るに其幼童あるよも似す其考此順路に出てすまて人

寡き隊勝たんと豫言せるは彼の腦中に起りたる最初の原意にほらずして衆は寡に勝つの原意に反省を加へて豫言せしものにして彼の他日明籌奇策は悉く此種の反省より來りしや更に疑を容る可らず蓋し人の思想即原意の起るには必ず一定の順路あることにて英雄も人あり凡人も人ある以上は一旦は必ず此順路に出づるものあり然り而して凡たり英たるの差を生ずるは此順路的の考に一反省を加へたる迄なり例へば迅雷風烈のときは聖人さへも變ずと云ふたる程にて誰も外出することを欲せざる人考ふる順路あり必ず一旦は之に出づるあり然るに一士官あり兼ねて其兵の悍懦を驗せんと考へたりしに幸ひ迅雷風烈の日に待ち構へまに兵士の出勤するもの至りて少あかりしに或者あり一旦は欠勤せんと欲せしに其原意に反省を加へて之れ丈夫の行く可き日ありとて出勤したりとせんか大に其勇を實せらるゝことある可きか如しされば英雄豪傑智勇兼備の大將ども稱せらるゝ人は概ね常人の出づ可き順路を棄てゝ第二路を取りたるものにして換言すれば原意に反省を加へて後に實行に懸りしものあり

シ
ビ
オ

又之を西洋の例に取ればローマとカルセーデと戰爭ありてローマは壘卵の危きに陥り其存亡旦夕に迫まりたる頃シビオある大將ありけりローマに於てカルセーデ人と戦ふことを止めてイスパニアに出てデブアルタルを渡りて陸路直にカルセーデの都府を攻めまかば當時カルセーデの都の兵は悉くローマ征伐に出て老弱婦女のみありまかば及に血ぬらずして勝を奏しローマを既に亡ぶるに救ひまのみかシビオアフリカヌスの名を得當時は固より名將の名今日に至るまで賞揚止まざるは如何其原因を尋ねればカルセーデ人をローマより追ひ退くるは常人の考ふ可き順路あるを之に一反省を加へ

て遂に本據攻撃の策を案し付きしなり英雄豪傑の跡を尋ねるに悉く然らざるを蓋し智謀策畧は悉く反省を経て初めて来るものあればあり即究して初めて略出づるものなりされば上の場合に若しカルセーザにも明將ありて考へんか必ず都府にも兵を置きしなる可し故に英雄豪傑の事業は往々相合することある所以なり例へば十年の役に熊本城が火を放ちしを見て西郷が「ダメダ」と云しとの話あるが如く英雄の爲す所は敵味方の策略符合することあるは之が爲なり蓋し策略謀計は悉く此原意と反省とを調和せしめたる結果に外ならざるあり之に由て之を觀る吾人は大に反省の價值あるを見るあり

釋 迦

釋迦の大聖として救主として宗教上尊信せらるゝは固より証明を要せずて大人豪傑たる所以なるも其唱へたる哲學も今に至りて光りを放ち敢て或は之を論破するを得るものあるを見ず巍然として哲學界上に聳ゆるを見るは何ぞや蓋し其根底深く強固あるに似らずんば決して此の如くなる能はざるなり即ち釋迦哲學の原意は反省に反省を加へて幾多の試験官の關門を通過し來りたるの結果に之由らずんばあらず何を以てか之を云ふ曰く釋迦の哲學は釋迦より初まるにあらずして其源を遠くバラモン教に發し僧伽サンキヤ哲學より來りたるものにして當時已に幾多の哲學者の研究を経て殆んど確固の基礎を立て世人の信仰を繋ぎたるバラモン教僧伽哲學に反省を加へ所謂蟠根錯節に遇ふて益々利器あることを驗査して而して後に其信す可く固執す可き想像を以て其哲學の根本とせしを以て此の如くなるを得るあり換言すれば佛教哲學は或る原意に當時にあらゆる哲學上の異説を取り來りて反省の材料とし其材料にて破壊す可らざるものを根據として佛教の大本としざるものなり蓋當時印度に

は甚數多の外道ありしとは同時の文學によりて証するを得る所なるが佛教は此等多くの外道に悉く反省を加へ其加へたる反省にて破毀し得可らざるものを以て建築したるの大廈に外ならず決して釋迦一人の想像にありしものにあらずして數百若くは數千年來數多の哲學家の腦漿を絞りたる世人の信仰を博したる健康ある材料分子を以て組織したるものにて釋迦は此等材料の集拾者なるのみ組織者あるのみ恐く創造者にあらず (Creator にあらずして Systematizer あり) …………… 其哲學の確固ある又宜なる哉又基督の一神教を唱へたるも彼の創設にあらず基督以前に基督教 (一神教) ありしより由是觀之即確固不拔の道理は反省より得來る結果ありとす

以上論ずる所を以て見れば計略と云ひ理論と云ひ健全にして百世の下に魏立し勝を千里の外に決せんには原意乃みにては不可にして必ず反省を要することは甚々明白あることありとす是れ第三類の人の第一類の人に優る所以あり然らば則第三類と第二類との差異如何之れ頗る困難ある問題にして之を區別すること困難なりとす今や余が竊かに以て區別の點あるかと思考する所を左に陳べんと欲す幸に大方の是正を待つ

甲、選擇力或は比較力或は取捨力の有無及多少

夫れ原意に反省を加ふるの點は第二類第三類とも全く同様なれども今第二第三類の人一人宛ありて二原意ある場合に各反省を加へたりとせんか一原意に反省を加へて發見したる誤謬の量と他原意に反省を加へて發見したる誤謬の量とを比較して二誤謬の量に差あるときは誤謬の少量ある方の原意を取りて行爲の標準とし信仰とすることの有無によるとの事之あり例ば茲に甲乙二原意ありとし (例は有神論無神論) 甲ある原意に「イ」ある反省を加へ若干の誤謬 (不道理) を發見せ又乙ある原意に

「ア」ある反省を加へて若干の誤謬を發見せたりとせんか甲乙共に誤謬あるの論說あり即原意なり然れども其甲原意の有する誤謬の量と乙の有する誤謬の量とに大なる差あるときは誰人も一見取捨する所ある可しと雖其差少あるときは之を撰擇し取捨すること難し(1)若し取捨し得ば第三類に屬し取捨し能はざれば第二類に屬す又取捨し得るとするも(2)若干時の間に取捨し得ると是れより一層長さ時間を経て後取捨するとは大に差ありて比較的短時間に取捨する人は第三類に屬し長時間に取捨する人は第二類に屬する如きものか即(2)の場合には第二類第三類共兎に角信仰を生し從つて行爲あるも(1)の場合には取捨し能はざれば遂に信仰なく從つて行爲なくして此世を終るなり(2)の時には結局積極的人とあるも(1)の場合の取捨し得ざる人は到底消極的に此世を終る人あり

乙、新奇の想像力及信仰の發生力の有無

甲の場合には原意二ありて其誤謬の多少に依て取捨す可き時あるが此乙の場合は一原意あり之場合(例へば地動説の起らざりし前の地靜説の如し)に其原意に反省を加へ而して若干の誤謬を發見し其極信す可らざるに至りしに其人只此破壞的の事業をなしたるのみにて別に新説を立つることなき場合より即反省を加へて地靜説の誤謬ありて信す可らざることを發見したりとするも然らば如何地靜あるか天靜なるか等の問題を研究して遂に地動説を發見したるか云ふに然らず只壊毀したる迄よて其破壊せらるたる説に代はる可き新説を發見創立すると否とにあらんか即ち新説を創立せは第三類に屬し然らざるは第二類に入るの如きにあらざるべきを得んや即此乙の場合にも新説を發見すれば其人積極的とあるも然らざれば消極的に空過する人とあらんのみされば一敵を斃したる後に進んで天下を經綸するは王者に必要なるは勿論哲學者としても普通人として有要のことなるか如し

丙、消極的の人物積極的の人物

上二段に於て詳論せる所より見るも明あるか如く世に消極的の人と積極的の人あり即一原意を起し之に反省を加へて其原意の非を發見し其にて止め別段に新説を立つる如きことなき人は消極的の人あり一原意一反省、一原一反、原又原と進んで止まざる如き人あり之を積極的の人と云ふ一は活潑々地抑へんとして抑ゆ可らず一は空々寂々死灰的にして已む寂々故に一挫終に止む潑地故に七轉八起き進んで已まざるものなり是積極的の人の真相にして遂に遠謀深慮戰はずして勝ち萬古の眞理を啓き不朽の新説を創立するを得る所以なる可し

丁、實行の有無(少く原意反省の問題外に出づるも)

夫れ實行の道德上其他百般の事に必要あるは言を待たずされば實行の有無は人の行爲に大差を生ず可し第三類には此實行力強きも第二類の人には或は此力少なきに拘らざるか(此實行の事は他日別に論す可し)蓋し大人豪傑は悉く此實行力強大ある人なり此實行力は甚大切あるものにして一名克已と云ふ其「克」ある字を用ゐるを見て其事の困難あるを推知すべし

吾人は以上四點の差異を以て二者の別區の標となす若し肯綮を得ば幸甚

論來り論去り吾人は以上を以て第一反省を有せざる人第二過量の反省を有する人及第三原意に反省を加へて其原意の可否を驗し而して後原意を實行する人を論じたり然り而して第二は吾人の標準として固より取る可らず第一は或は大人豪傑を出すことある可きも之れ甚だ危險あることなきをば之れ又模範とす可らず然らば則第三か、此れ誠に吾人青年の模範標準として磨勵す可きものたり然りと雖吾人は容易に其域に達すること難き即之に達する手段を見出すこと甚困難あるを如何せん然らば

則如何せば則可あらん余に一策あり乞試に之を陳せん

以土度々論せし如く實行の點よりすれば反省なきを利とぞ原意の可否の點よりすれば反省を必要とする事となれば此二個の必要を包括する如き規則を設けて以て行爲の標準とせば先づ可あるか如し故に左の規則を得たり

第一大事を行はんとするに當てのミ反省を加へ小事は原意の儘に反省なく實行す可し

第二心理學の別に從へば心を智情意とすると云ふが意は此の智情より發するものあれば一旦起りたるものは容易に之を止むること難ければ宜く意とならざる内に反省を加へ意となりたらば猶豫なく斷行す可き即規則を設けて曰智識感情には反省を加へ意思には反省を加へざるを可とす

第三夫れ人事は大概は一考し置くを得可きものにして全く初めて出會する如き事は殆んど稀なりされば大概の事は兼て思慮し置き平常は専ら實行を主とし反省を加へざる積りにて可なり即規則を設けて曰大概の事件は豫め一考し置き只正に實行を旨とし而して若之迄全く考へざりし大事起りし時にのみ反省を使用し後決行すと心得可し

吾人は以上を以て心性作用には原意と反省の二元象あることを論し反省を経ざる原意は誤謬に陥り(智識に云ふ)中庸を失し(感情に云ふ)危險ある結果を生ずるべし(意思に云ふ)あるを論し原意をして正確直實中庸及主觀客觀共に善からざるには反省の必要あることを論したり然れども反省は破壞的若くは消極的作用にして原意は建設的或は積極的あれば反省のみありて原意なき時は一の信仰なく一の行爲なかる可きを論えたり則ち行爲の源泉を如何にす可きやの問題は論じたり是より進んで此源泉をして河川たらしめ海洋たらしめ瀑布たり激湍たり靜淀たり汪汪たる怒濤たらしむる所の

ものを論せんと欲す

蓋し人間萬事は悉く上の意識の發動にして此意識は感情智識より來るものなれば其源たる感情智識の正にして眞あらざる可らざるは勿論なり即余れ考ふる所によれば大人豪傑名將賢相等主觀客觀上に大事業をなし大勳功を奏し億兆の救主とある如き人は眞なる智識正たる感情善ある意思を有する人あることを信し其然るを得るには智情意に反省を加へされば主客觀共に眞美善あることを得ずと云ふとに歸着す即人間行爲乃源泉たる心性作用を如何にす可きかは論したり然れども此れは之れ人間の一半若くは一小部分なるのみ他は人間たる所以の一大半存するものあり何ぞや上の一半をして視る可く聽く可く感す可き事實とあらしむる所の現象に於て吾人は之を實行と名づく上一半の心性作用の化石之あり此化石は大概の場合は大人小人正邪善惡賢愚聖凡の標準となる可きものにして手近く云は、江戸城は太田道灌の化石なり濟生學舎は長谷川氏の化石なり十年の役は西郷の化石なり淺草寺は同寺開山の化石なり佛教自身は釋迦の化石なり故又鎌倉の大佛奈良の大佛其他我全國支那印度に殆んど至る所に存在する堂塔伽藍は佛教信者の化石なり獨逸のキョルンの大教堂——高百五十メートル三百年の星霜を経てあり歐洲にて最大の建築の一——は基督の化石なり北米合衆國はワシントン^{ワシントン}の化石なり北方の鷲^{イーグル}—魯西亞^{ロシア}—はピーター大帝の化石なり上下三千年金甌無缺の我大八洲は神武天皇の化石なり嗚乎心の眞美善の度大あれば大なる程化石大あるか如き故に吾人は可成偉大宏壯の石工とあるの覺悟なかる可らず然り而して此奇態なる化石は皆悉く幽冥なる原意より出てたるものなり即化石は結果にして原意は原因なり故に結果の大あるを望まば又原因を大にせざる可らず而して青年學生は實に此原因を大にす可きの時なり此原因を別語にて言へは目的と名づく所謂る

原意なり此目的を實ならしむる所のものを實行と名づく此の目的原意を實ならしめたるものを化石（事業）と云ふ蓋し人間には此目的の甚だ大切であると共に之を實ならしむる實行の頗大切なことを忘る可らず然り而して此目的を立つるとは左程難からざるも此實行に至まては聖賢豪傑も難んずる所にして天下雲の如き學生の「千三ッ」の稱を得る一大原因なりとす吾人乞ふ他日之を論せん（完）

宗教改革

第一 宗教改革の動運

杉山富樫

コンスタンチン大帝の時より後、基督教は殆ど歐洲全土に擴布せられて、其勢力實に偉大なりき。羅馬帝國は既に破壊し、北狄蠻人は益々暴力を逞ふし、社會の安寧秩序は亂れて、茲に中古の暗黒ある時代は來れり。基督教は此支離滅裂ある時代に於て、依然として其勢力を有ち、社會の一致を保持する唯一の羈絆として残り、或は新來の國民を教育し、或は之を教化して敬虔を修練せしめ、以て新舊の國民を合一し、或は文學の保護者となり、或は美術の奨勵者となり、或は賢才英俊を網羅して十分に才藝を發揮せしめ、或は武士をして高潔閑雅の精神を修養せしめ、以て千有余年の間文明の保護者として天下に雄飛せり。實に中古の暗黒時代に於ける基督教の勢力と其効驗とは決えて消滅し去る可らず。

中古の暗夜は既に更け、近世の曙光は漸く東天に現はれたり。第十六世紀は正に中古の鴻荒^{ケイサス}の產出せる近世の文明が世人に認識せられし時あり。火藥は發明せられて戦争の方略は一變し、從て封建の制度に影響し、活版印刷機の發明は世界の思想をして互に比較し相競争せしめ、羅針盤の應用は遠洋